

岩手大学人文社会科学部 平成12年度 後期

フランス文学特講

ロラン・バルトとノの文芸思潮

Résumé

本講義は
平成11年度福島大学行政社会科学部で行なった
集中講義「欧米文化論」を元にしたものである

ロラン・バルトとノの文芸思潮：目次

【文学論的前提】	3
詩学 vs 修辞学	3
《科学的》批評と文学史	3
文芸学	3
ロシア・フォルマリズム：自立した文芸学（文学の科学）の創始	3
詩学派	3
【ロラン・バルト：エクリチュールの人】	4
ヌーヴェル・クリティックとロラン・バルト	4
バルトは何者か？	4
バルトによるバルトの変容	4
変容するエクリチュール	4
『零度のエクリチュール』	4
「作家と著述家」	4
その他	4
【社会的神話論】	5
『ミシュレ』	5
『神話作用』	5
【文学とノの科学】	6
バルト vs ピカール 論争	6
「二つの批評」	6
「批評とはなにか」	6
<i>Sur Racine</i>	6
Raymond Picard, <i>Nouvelle critique ou nouvelle imposture</i>	7
Barthes, « Au nom de la < nouvel critique >, Roland Barthes répond à Raymond Picard »	7
文学と科学	8
<i>Critique et vérité</i>	8
「科学から文学へ」	8
【記号学・物語の構造分析】	9
記号学研究	9
「記号学の原理」	9
記号学研究・物語の構造分析	11
「物語の構造分析序説」	11
構造分析からテキスト分析へ	12
「物語の構造分析 『使徒行伝』10-11章について」	12
「天使との格闘 創世記32章23-33節のテキスト分析」	13
【テキスト性】	14
作者・作品・テキスト	14
「作者の死」	14
「作品からテキストへ」	14
テキスト理論	15
クリステヴァのテキスト理論	15
「テキスト その理論」	17
テキスト分析	17
『S/Z』	17
テキスト性	17
『表象の帝国』	17

【Roland Barthes の主要著作】

- * *Le degré zéro de l'écriture*, coll. < Pierres Vives >, Seuil, 1953.
『零度のエクリチュール』 (+ 記号学の原理)、渡辺・沢村 訳、みすず書房、1971
- * *Michelet*, coll. < Écrivains de toujours >, Seuil, 1954.
『ミシュレ』、藤本治 訳、みすず書房、1974
- * *Mythologies*, coll. < Pierres Vives >, Seuil, 1957.
『神話作用』、篠沢秀夫 訳、現代思潮社、1967
- * *Sur Racine*, coll. < Pierres Vives >, Seuil, 1963.
- * *Essais critiques*, coll. < Tel Quel >, Seuil, 1964.
『エッセ・クリティック』、篠田・高坂・渡瀬 訳、晶文社、1972
- * *La Tour Eiffel*, Delpire, 1964
『エッフェル塔』、宗・諸田 訳 (1979)、ちくま学芸文庫、1997
- * *Éléments de sémiologie*, coll. < Méditations >, Denoël/Gonthier, 1965.
『零度のエクリチュール』 (+ 「記号学の原理」)、渡辺・沢村 訳、みすず書房、1971
- * *Critique et vérité*, coll. < Tel Quel >, Seuil, 1966.
- * *Système de la mode*, Seuil, 1967.
『モードの体系』、佐藤信夫 訳、みすず書房、1972
- * *S/Z*, coll. < Tel Quel >, Seuil, 1970.
『S/Z』、沢崎浩平 訳、みすず書房、1973
- * *L'empire des signes*, coll. < Les sentiers de la création >, Skira, 1970.
『表象の帝国』、宗左近 訳 (1974)、ちくま学芸文庫、1996
- * *Sade, Fourier, Loyola*, coll. < Tel Quel >, Seuil, 1971.
『サド、フーリエ、ロヨラ』、篠田浩一郎 訳、みすず書房、1975
- * *Nouveaux essais critiques*, coll. < Points >, Seuil, 1972.
『新 = 批評的エッセー』、花輪光 訳、みすず書房、1977
- * *Le plaisir du texte*, coll. < Tel Quel >, Seuil, 1973.
『テクストの快楽』、沢崎浩平 訳、みすず書房、1977
- * *Roland Barthes par Roland Barthes*, coll. < Écrivains de toujours >, Seuil, 1975.
『彼自身によるロラン・バルト』、佐藤信夫 訳、みすず書房、1979
- * *Fragments d'un discours amoureux*, coll. < Tel Quel >, Seuil, 1977.
『恋愛のディスクール・断章』、三好郁朗 訳、みすず書房、1980
- * *Leçon*, Seuil, 1978.
『文学の記号学』、花輪光 訳、みすず書房、1981
- * *Sollers écrivains*, Seuil, 1979.
『作家ソレルス』、岩崎・二宮 訳、みすず書房、1985
- * *La chambre claire*, coll. < Les cahiers du cinéma >, Gallimard/Seuil, 1980.
『明るい部屋』、花輪光 訳、みすず書房、1985
- * *Le grain de la voix*, Seuil, 1981.
- * *L'obvie et l'obtus - Essais critiques III*, coll. < Tel Quel >, Seuil, 1982.
『第三の意味』 & 『美術論集』、沢崎浩平 訳、みすず書房、1984 & 86
- * *Le bruissement de la langue - Essais critiques IV*, Seuil, 1984.
『物語の構造分析』 & 『言語のざわめき』、花輪光 訳、1979 & 87、『テクストの出口』、沢崎浩平 訳、みすず書房、1987
- * *L'aventure sémiologique*, Seuil, 1985.
『旧修辞学』、沢崎浩平 訳、1979、『記号学の冒険』、花輪光 訳、みすず書房、1988
- * *Incidents*, Seuil, 1987.
『偶景』、沢崎・萩原 訳、みすず書房、1989
- * *Ceuvres complètes*, éd. Eric Marty, Seuil, 3 vols, 1993-1995.

ロラン・バルトとノの文芸思潮

【文学論的前提】

詩学 (poiétique) vs 修辞学 (rhétorique)

* アリストテレス (*384-*322) : 創作論 (悲劇 & 叙事詩)

cf. アリストテレス & ホラーティウス、『詩学・詩論』、松本・岡 訳、岩波文庫、1997

cf. アリストテレス、『弁論術』、戸塚七郎 訳、岩波文庫、1992

* キケロ (*106-*43) : 弁論術の大成

種類 (評議、演説、法廷)

配列 (序論、陳述、立証、結論)

部門 (発想、配置、修辞、記憶、発表)

cf. Cicéron, *De l'orateur*, éd. H. Bornecque & E. Courbaud, coll. < Université de

France >, Belles Lettres, 3 vol., 1922-30.

cf. Cicéron, *Division de l'art oratoire - Topiques*, éd. H. Bornecque, coll. < Université de

France >, Belles Lettres, 1960.

《科学的》批評と文学史

* テーヌ (1828-1893) : 還元論的決定論 (人種、環境、時期と主要機能)

cf. Hyppolite Taine, *Histoire de la littérature anglaise* (1864), Hachette, 1895.

cf. Hyppolite Taine, *Philosophie de l'art* (1865-69, 1882), Slatkilne, 1980

* ランソン (1857-1934) : 歴史・実証主義による文学史

cf. Gustave Lanson, *Essais de méthode, de critique et d'histoire littéraire* (1887-1932),

Hachette, 1965.

cf. Gustave Lanson, *Méthode de l'histoire littéraire* (1925) - *Hommes et livres* (1895),

coll. < Ressources >, Slatkilne, 1979.

文芸学

* カイザー (1906-1960) : 文芸学 = 理論的問題の体系

cf. ヴォルフガング・カイザー、『言語芸術作品』(1948)、柴田斎 訳、ユニベルシタス、法政
大学出版局、1972

ロシア・フォルマリズム : 自立した文芸学 (文学の科学) の創始

* 「モスクワ言語サークル」(1915) : ロマン・ヤコブソン、ボガトウイリョフ、ブスラー
エフ、ヴィノクー、ボリス・トマシェフスキー

* 「オポヤーズ (詩的言語研究会)」(1916 : ペテルブルク) : ヤクピンスキー、ポリワー
ノフ、ヴィクトル・シクロフスキー、ボリス・エイヘンバウム、ユーリー・トゥニヤ
ノフ

cf. エイヘンバウム、「『形式主義的方法』の理論」(1925) in 『ロシア・フォルマリズム文学
論集1』、北岡・小平 訳、せりか書房、1982

詩学 (poétique) 派

* トドロフ (1930-) : 物語の科学 (ナラトロジー)

cf. Tzvetan Todorov, *Grammaire du Décaméron*, coll. < Approaches to semiotics >,

Mouton, 1969

* ジュネット (1930-) : 文学形式の一般理論としての詩学

cf. Gérard Genette, « Critique et poétique », in *Figure III*, coll. < Poétique >, Seuil, 1972.

cf. ジェラルド・ジュネット、『物語のディスコース』、花輪・和泉 訳、記号学的実践、

風の薔薇

【ロラン・バルト (1915-1980) : エクリチュールの人】

ヌーヴェル・クリティックと Roland Barthes 【資料 No. 1】

バルトは何者か？

cf. 篠田浩一郎、『ロラン・バルト - 世界の読解』、岩波書店、1989

cf. Louis-Jean Calvet, *Roland Barthes*, Flammarion, 1990

ルイ = ジャン・カルヴェ、『ロラン・バルト伝』、花輪光 訳、みすず書房、1993

cf. 鈴木和成、『バルト、テキストの快楽』、現代思想の冒険者たち、講談社、1996

バルトによるバルトの変容

* 社会的神話論 記号学 テキスト性 道德性

cf. 『彼自身によるロラン・バルト』 p.228

変容するエクリチュール

『零度のエクリチュール』(1953) 【資料 No. 2-3】

* 言語 (langue) : 規則的・習慣的な一つの全体 (un corps)、人間的地平線

* 文体 (style) : 生のもの、思考の垂直 (parole : 水平構造) で孤独な次元、生物学的

* エクリチュール (écriture) : 歴史的連帯行為、形式のモラル、社会的選択

E の選択の自由はその時期に応じた限界をもつ 歴史と伝統の圧力のもとに作家の
可能な E が決まる E の歴史が存在する

* 零度のエクリチュール : 白い E

cf. Jacques Derrida, *De la grammatologie*, coll. < Critique >, Minuit, 1967.

「作家と著述家」(« Écrivains et écrivants », 1960) in 『エッセ・クリティック』

* 作家 (écrivain) : 非他動的 vs 著述家 (écrivain) : 他動的人間 【資料 No. 8】

「解答」(« Réponses » in *Tel Quel* 47, Seuil, 1971)、三浦信孝 訳、in 『現代史手帳 - 12月
臨時増刊 ロラン・バルト』、思潮社、1985 【資料 No. 3】

* 作家 vs 著述家 écriture (style) vs écrivance (écriture)

その他

: E 文学的神話の Sa 『神話作用』、E 集団のイデオロクト 『記号学の原理』、

E 文学 『批評と真実』、E パロール 『サド、フーリエ、ロラ』、E 文体 『新 =

批評的エッセー』、E さとり 『表象の帝国』、E 言表行為 「回答」 in *Tel Quel* 47、

E テキスト 「テキスト理論」 in *Encyclopædia universalis*、E 創造 in *Le grain de lavoix*

【社会的神話論】

『ミシュレ』 : « Je suis un homme complet, ayant les deux sexes de l'esprit »

* 『ミシュレ』の読み方【テーマ批評】 【資料 No. 4-5】

反復するテーマ : 「テーマは全作品を通じてくり返される」 p.253

実体としてのテーマ

: 「テーマは実体的であって、題材の若干の特質にたいするミシュレの態度がテーマにこめられている」 p.255

: 「ミシュレ的テーマは、二つの根、すなわち歴史的根源と実存的根源とをもっている」

還元するテーマ

: 「『蛮族』、『子供』、『涙』は、潤いのある円やかな熱の選択に還元することのできるテーマである」 p.256

: 「テーマを識別し、かつテーマの一つ一つの裏側にそのテーマの実体的意義やそのテーマに関連した他の諸テーマを想起して、これにそのテーマを重ねて考えることができる場合にはじめて、ミシュレの読み方は完全なものとなる」 p.257

『神話作用』 : 「神話とは言語 (langage) である」 p.1 【資料 No. 6-7】

* 今日における神話 : 「神話とはことば (parole) である」 p.139

神話とはコミュニケーションの体系であり、メッセージである 神話は対象でも概念でも観念でもなく、意味作用の様式であり形相である p.139

神話は言語学の外延としての一般科学すなわち記号学に属す p.142

記号学は、意味作用をその内容から独立して研究するため、形相の科学である p.143

cf. Ferdinand de Saussure, *Cours de linguistique générale* (1916), éd. de Tullio de Mauro (1967), coll. < Payothèque >, Payot, 1982.

* 対象言語 (langage-objet) vs メタ言語 (méta-langage) 【コノテーションへ】

ex. Quia ego nominor leo. (なぜなら私はライオンという名だ) vs (私は文法の例文だ)

* 神話の読み方 p.167

: Sa vide に焦点を合わす : 神話の生産者、新聞の編集者の立場

神話の概念 (Sé) は明確 : ex. 敬礼する黒人 = 「フランス帝国」性

: Sa plein に焦点を合わす : 神話学者の立場

意味と形式とが分離 : 意味作用の分解 神話 = まやかし

ex. 敬礼する黒人 = 「フランス帝国」性 (植民地主義) の不在証明

: 意味と形相に分解できない全体としての Sa に焦点を合わす

神話の構成上のメカニズムにこたえ、神話の読者となる

ex. 敬礼する黒人 = 「フランス帝国」性の存在そのもの

* 神話の原理 : 歴史を自然に移行させる p.169 上記のダイナミズム

* 神話の特性 : 意味を形式に変化させる : 言語 (langage) を盗む p.172

言語 (langue) は神話によって頻繁に盗まれている言語 (langage) であるが、その抵抗は弱々しい、一方、神話に可能な限り抵抗する言語として詩的言語 (langage poétique) がある : 神話は超・意味作用 (ultra-signification) を目指す (= 事実の体系へ向かって自らを超越しようとする記号論的体系) が、詩的言語は下・意味作用 (infra-signification)、言語 (langage) の前・記号論的 (pré-sémiotique) 状態を再発見しよう (= 本質の体系へ収縮しようとする記号論的体系) とする

* 神話 = 非政治化された言語 ブルジョワ社会における神話の記号論的定義 p.189

* 左翼における神話 = 非本質的 vs 右翼における神話 = 本質的 pp.195,197

【文学と / の科学】

バルト vs ピカール (Picard) 論争

「二つの批評」 (« Les deux critiques », 1963) in 『エッセ・クリティック』 (1964)
解釈批評と対立する講壇批評は内在研究を拒否する 【資料 No. 8】

「批評とはなにか」 (« Qu'est-ce que la critique ? », 1963) in 『エッセ・クリティック』

* 「ランソン主義はその断定的方針を語らず、それを厳密さと客観性という教訓的な衣でおおい隠している」 p.352

* 批評の任務：《真実》を発見することではなく、有効性を発見することである 言語はそれ自体として真実でも虚偽でもなく、有効であるか否かであるため：有効とは首尾一貫した記号体系を構成しているかどうかである p.352

Sur Racine (1963) cf. 「ラシーヌ論」渡辺守章 抄訳、『現代思想 特集 = ロラン・バルト』、青土社、1980年6月号 【資料 No. 9】

序論

* L'Homme Racinien : 分析対象はラシーヌではなく、héros racinien である p.9
作品を作家の下位に置いたり、その逆をしたりはしない

* Histoire ou Littérature ? : ラシーヌを通して批評の一般問題を扱う
大学の文学史に対し、真の歴史と心理学的アプローチを問う

L'Homme Racinien (1960 : *Théâtre Classique Français*) p.13
【ラシーヌの作品一般を通じてのテーマ批評】

Dire Racine (1958)

* 今日の読者はラシーヌの作品を人間学的に消費している
主人公の性格や演ずる俳優などが中心：いかにしてこの状況から抜け出せるか？

Histoire ou Littérature (1960)

* 文学史は歴史といっても名前だけで、実際はモノグラフィーの羅列 p.148
histoire ではなく chronique 文学史と批評の間には差異はない
文学史は作品の歴史にすぎない p.149

作品はその歴史とは異なるものであるから、文学の歴史はなく、諸文学の歴史のみがある

* 文学における二つの公準

: 歴史的 文学が制度である限りにおいて

: 心理学的 文学が創造である限りにおいて

文学研究には対象と方法の異なる二つの disciplines が必要：これまで混同されてきた

* Lucien Febvre の研究について

: 環境の研究

Picard への言及 p.151 : ラシーヌの観客についての偶発的な remarque や chiffres précieux が多いが、誰が演劇を見に行ったかというような本質的問題は謎 ; cf. p.154 (17世紀後半における文人の状況 : 慧眼ではあるがラシーヌだけしか見ていない)

: 観客の知的形成の研究

ジャンセニズムの教育は革命的であった、などとよく言われるが、それ以上の一般的教育やそのシステムについては触れられない

* 総合的研究が必要な時期に来ているがまだ未完成

ラシーヌ研究は本質的に大学人の仕事になっているため、領域の侵犯ができない

- * 言語研究にしても古典的修辞学のものがあるだけで、文体や言語からだけでは、言語活動に必要な世界の切り取りは分からない
- * 文学の機能にこそ(文学)史は位置づけられる p.156
- * 作者の批評は記号学である
 - ひとつの記号表現に対し幾つもの記号内容がある：記号は曖昧であるため解釈は常に選択である p.160
- * 人間への接近については心理学がもっとも improbable である：深層の自我の認識は幻想でしかない：人間を語る様々な方法があるのみ
 - ラシーヌは幾つもの言語(精神分析的、実存主義的、悲劇的、心理学的など)に向けられている p.166

Raymond. Picard, *Nouvelle critique ou nouvelle imposture*, coll. < Liberté >, Pauvert, 1965.

- * 近年の批評の特徴：physionomie がオリジナル p.9
- * 解釈批評 (critique d'interprétation)、イデオロギー批評 (critique idéologique)、ヌーヴェル・クリティックは、知的というよりは論争的 (polémique) である p.10
 - ラシーヌ研究について言えば、ラシーヌの作品に立脚して判断すべきで、未規定のイデオロギー的概念などに寄りかかってはいけない
 - 最初バルトの著作を本気にはしていなかったが、63年に他の論文と共に出版されたとき、間違いに気づいた：事態は見過ごすことはできない p.11
- * バルトの真理を検証しよう
 - 真理は indifférente である 何の説明もなく変わったりする (Néron の記述について)：あるテーマの分析は特定の作品にしか行われていない soleil や lumière の signification は何か説明されていない 分析は哲学的考察というよりは、サロンでの気晴らし pp.19-23
 - バルトに見られる二つの registres
 - ：ordre vaticinal (予言者の次元) 説明も明晰さもないがそのまま信者に受け入れられる
 - ：理由も例証もあるもの 残念なことにもろい土台に依拠している p.24
 - sexualité の意味について：バルトは執着している(ラシーヌの意味を取り違えながら)
 - カップルの関係図式も 1 1 の戯曲に対して 3 つのみ有効：Phèdre と Hippolyte については当てはまらない(バルトは当てはめようとしている) p.33
- * 科学や哲学の新語は正確さを期すために造語されるが、バルトの jargon の機能は不条理なものに科学的威厳を与えるためや、思考の不確かさを隠すためのようである (apnée 呼吸停止をめぐって)：バルトの jargon はむだ pp.51-57
 - バルトの著作は科学的思考の基本的諸規則を理解していないようだ p.58
- * バルトの批評は二つの態度に関わる
 - 印象主義的態度とドグマ的態度：印象主義的態度は個人の個性のうちに真理を見出すが、教条主義的批評は客観的・普遍的主張によってなされるため、この二つの態度は相いれない
 - バルトはよって、教条主義的本質からなるイデオロギー的印象主義を生み出した p.75
- * バルトは大学での研究を矮小化されたランソン主義だと誤解している p.83
- * バルトは才能の持ち主であるが、間違っている (talent incontestable mais dévoyé) p.85

Barthes, « Au nom de la < nouvel critique >, Roland Barthes répond à Raymond Picard », in *Le Figaro littéraire*, 14-20 octobre 1965.

- * 「ピカールは彼の専門分野であるラシーヌについて私が書いたものだから、とりわけ私を攻撃しているのです。そこは彼の禁猟地というわけです。しかし私は、ラシーヌはみんなのものだと主張したい。」 *Œuvres complètes I*, p.1563

文学と科学

文学から科学へ、文学の科学、科学から文学へ

Critique et vérité (1966)

- * 文学の科学と文芸批評：作品の意味の複数性を対象とする一般的言説 vs 作品にひとつの意味を与える言説 p.56
さらに直接的な「読解」(書かれない)をも区別する必要がある：科学、批評、読解

La Science de la littérature

- 文学史はあっても文学の科学がないのは文学の対象がはっきりしないため
作品はエクリチュールによってなされると認めるならば、文学のある種の科学が可能
対象はひとつの意味に限定されてはならず、内容の科学ではなく、内容の条件
(conditions)、すなわち形相 (formes) の科学となろう p.57
- * 文学の科学のモデルは言語学 (チョムスキーの生成理論)
作品がいかにか受入可能かを探る：文章の文法性が重要で、その意味作用ではない
- * 文学科学の対象の再分配
作者や作品はランゲージが地平であるところの分析の出発点にすぎない：ダンテやラシーヌ
の科学があるのではなく、言説の科学がある p.61
- * 言説の科学の二つの領域
：文章以下の記号：文彩やコノテーション：文学的言語の特徴
：文章以上の記号：物語や詩的メッセージや言説的テクストの構造を導入する言説の全部
- * 文芸科学が関心を寄せるのは作品が存在していることではなく、それが理解され、今後も理解されるということであり、理解可能性が作品の客観性の源泉であろう
- * 文学の科学を可能にするのは言説の言語学である p.63

La Critique

- * 批評は科学ではなく、意味を扱い意味を生産する
科学と読解の間に位置づけられる
批評家は作品を《翻訳》するなどと言ってはならない：作品より明白なものはない 批評家
にできることは作品である形相から派生するある種の意味を生み出すことである
- * 批評は翻訳ではなく迂言 (périphrase) である p.69

La Lecture

- * 批評家はいかなる点においても読者に代わることはできない：批評家は書く読者である
ため、エクリチュールが介在する：書くということは世界を再構成することである p.76
- * 読むということは作品を désirer すること、作品であろうとすること p.79

「科学から文学へ」 (« De la science à la littérature », in *Times Literary Supplement*,
28 septembre 1967, sous le titre « Science versus litreture ») in 『言語のざわめき』

【資料 No. 10】

科学はその内容や方法、倫理によって規定されるのではなく、単にそのステイタス、
つまり社会的規約 (制度) によって規定されているにすぎない：社会が伝えるに価値ありと判断した事項が科学の対象：科学とは教えられるもの

科学が教えられるもの、言表され陳述されるものであるのに対し、文学は伝達される
というよりは実現されるものである：科学は話され、文学は書かれる

- * 文学の科学：文学における構造主義
科学としての構造主義は、

：内容のレベル（内容の形式、物語の言語）において、物語の分節や物語の単位やそれらを結びつける論理

：言説の形式のレベルにおいて、分類、序列、配列に注意する：旧来修辞学があった

：語のレベルにおいて、外示的な意味のみならず、付加的な意味に満ちており、文化的指標とも、修辞学的モデルともなる

において自らを見い出す：言説の言語学の確立を目指す

構造主義がその企ての中に科学的言語活動の壊乱を据えない限り、つまり、書かれるようにならない限り、それは一つの余計な《科学》にすぎなくなる：構造主義に残された道は《作家》になること

* 作家への道

美しい文体を実践するのではなく、言表行為につきまとう問題を見い出すこと

：主観性と客観性も関係：研究における主体の位置

科学的言説における（主体の）欠如の形態も、厳密には主体ではなく、排除されているのは心理的、感情的、伝記的な《人格》にすぎない：言説において客観性とは想像的なものである

：エクリチュールだけが言語活動を全体的におこなう

科学的言説を思考の道具として用いるということは、そこに中性的な状態を仮定し、特殊な文学的言語はそこからの偏差として退けることになるという考えであり、エクリチュールはその権威への意義申し立てをする

：科学とエクリチュールの間には、科学が取り戻さねばならない快樂の領域がある
科学的言説の意識、構造、目的を変革すること

：文化のメタ言語としての構造主義を乗り越え、自らをその対象と完全に同質的にすること 以下の二つの方法が可能

：徹底的な形式化

：十全なエクリチュール 科学が文学となる

【記号学・物語の構造分析】

記号学研究 : *Communications 4 - Recherche sémiologiques*, Seuil, 1964.

ブレモン (Claude Bremond)、トドロフ、メッツ (Christian Metz)、バルト

「記号学の原理」 【資料 No. 11】

ソシュール：記号学 言語学 vs バルト：記号学 超言語学 (trans-linguistique)

：ラング (langue) とパロール (parole)

1.2.2 衣装の体系 p.114

* 書かれた衣装

：ラング コードを作り上げる集団による & 抽象化が書かれることにより具象化

：パロールは不在

* 写真に撮影された衣装

：ラング 疑似実在的衣装

：（凝固した）パロール 標準固体としてのモデル

* 着用された衣装

：ラング = 衣装を作っている部分や部分を相互に連合させる際の規則

: パロール = 無秩序な製作や個人の着こなし

: シニフィエ (signifié) とシニフィアン (signifiant)

2.1.2 言語記号

* マルチネ: 二重分節 (double articulation)

記号単位 (有意単位): monème > 弁別単位: phonème

cf. André Martinet, *Éléments de linguistique générale* (1960), coll. < U prisme >, A. Colin, 1980.

cf. André Martinet, *La linguistique synchronique* (1965), coll. < SUP >, P.U.F., 1974.

2.1.3 形相 (forme) と実質 (substance) p.132

* イェルムスレウ: Sa 表現: 形相と実質 / Sé 内容: 形相と実質

cf. Louis Hjelmslev, *Prolegomena to a Theory of Language* (1943), trad. F. J. Whitfiels, U. of Wisconsin Press, 1969.

: 表現の実質 (音声学上の音)

: 表現の形相 (範列や統治の規則)

: 内容の実質 (シニフィエがもつ情動、イデオロギー)

: 内容の形相 (意味論的標識の有無による Sé 間の形相的組織: 補足困難)

これらの区分は「書かれたモード」のような、Sé が本来属す体系の実質以外のなかで実質化されているような体系を扱う場合に有益

2.1.4 記号学的記号 p.134

* 言語学的記号と同じように記号学的記号も Sa / Sé から成るが、実質のレベルにおいて、記号学的体系ではたいていの場合、表現面での実質の本質 (être) は意味作用のうちにはない (ex. 衣服は記号として何かを表している場合においても、なお体を保護する)

こうした実用的・機能的な性質の記号を「記号性機能体」(fonction-signe) と呼ぶ

2.4 記号作用 [意味作用] (signification)

* 記号作用 = 過程 (procès) p.144

: ソシュール: Sa / Sé

: イェルムスレウ: 表現 (E) / 関係 (R) / 内容 (C) 入れ子関係: E R (E R C)

: ラカン: S / s

cf. Jacques Lacan, *Écrits*, coll. < Le champ freudien >, Seuil, 1966.

: 連辞 (syntagme) と体系 (système)

ソシュール: 連辞 vs 連合 (association)

バルト: 連辞 vs 体系 範列 (paradigme) p.158

ヤコブソン: 換喩 (métonymie) vs 隠喩 (métaphore) p.159

cf. Roman Jakobson, « Deux aspects du langage et deux types d'aphasies » (1956), trad. Adler & Ruwet, in *Essais de linguistique générale*, coll. < Arguments >, Minuit, 1963.

: デノテーション (dénotation: 共示) とコノテーション (connotation: 外示)

2.1 入れ子体系: イェルムスレウ

* コノテーション的記号集合 (sémiotique connotative): (E R C) E R

* メタランガージュ (métalangage: 高次言語): E R (E R C)

2.3 高次言語

* モード雑誌に見られる複合関係

cf. 『モードの体系』(1967): 作業 1957-1963 年

記号学研究・物語の構造分析

: *Communications 8 - Recherche sémiologiques - L'analyse structurale du récit*, Seuil, 1966.

グレマス (Algirdas Julien Greimas)、ブレモン、エーコ (Umberto Eco)、メッツ、グリッティ (Jules Gritti)、モラン (Violetto Morin)、トドロフ、ジュネット、バルト

「物語の構造分析序説」 (« Introduction à l'analyse structurale des récits »)

in 『物語の構造分析』

* 構造主義の問題

パロールが由来するラング、パロールを生み出すラングを記述することによって、パロールの無限性を制御すること p.2

物語の構造は物語のなかに求められるが、帰納的方法は不可能 物語分析は演繹的になる 仮説的な記述モデル (理論) から出発 p.4

物語の言語 (langue)

* 文を越えたディスクール (discours : 言説) の文法が必用 : cf. 修辞学

* 三つの記述レベル p.10

機能 (fonction) : プロップ & ブレモン

cf. Vladimir Propp, *Morphologie du conte* (1928), trad. M. Derrida, coll. < Points >, Seuil,

1973 ウラジミール・Y・プロップ、『昔話の形態学』、北岡誠司 訳、水声社、1983

cf. Claude Bremond, *Logique du récit*, coll. < Poétique >, Seuil, 1973

行為 (action) : グレマス

cf. Algirdas Julien Greimas, *Sémantique structurale*, coll. < Langue et langage >, Larousse,

1966 アルジルドス・ジュリアン・グレマス、『構造意味論』、田島・鳥居 訳、紀伊国屋書店、1988

物語行為 (narration) : トドロフ cf. Tzvetan Todorov, *Grammaire du Décaméron*,

coll. < Approaches to semiotics >, Mouton, 1969

機能

機能は言語学的単位とは無関係であり、文より上位の単位であったり、下位の単位であったりし得る p.14

* 単位クラス

機能の二つのクラス

: プロップ以来の分布的 (distributionnelles) な「機能 (fonctions)」: 民話

: 上記を補完し、物語の諸状況、登場人物の性格づけなどをおこなう同化的

(intégratives) な「指標 (indices)」: 心理小説 p.16

「機能」の下位クラス

: それを削除されれば物語内容 (histoire) が変わってしまう「基幹機能 (fonctions cardinales) または核 (noyaux)」: クロノロジックでありかつ論理的

: それを削除されても物語内容は変わらないが、ディスクールが変わってしまう「触媒 (catalyses)」: 純粋にクロノロジック p.17

「指標」の下位クラス

: ある感情、雰囲気などに関する本来の「指標」

: 時間内や空間内に同定したり位置づけたりする「情報 (informations)」 p.20

上記四つの下位クラスは排他的ではなく、ある単位は同時に二つのクラスに属することができる: ただし「基幹機能」は、他の三つのクラスとは性格が異なり、触媒、指標、情報は、基幹機能に対して拡大的であり、必用十分な基幹機能にくらべ、それらは無限に増殖し得る

* 機能の統辞法 p.23

物語における年代的順序性に対する論理性の優位：物語的論理が物語時間を説明する
ブレモン：厳密な意味で論理的、グレマス：言語学的論理、トドロフ：物語的論理

* 「シーケンス (séquence)」 = 機能体の小さな集まり

シーケンスは連帯性によって結ばれた核の論理的連続 p.26

一つのシーケンスが終わらないうちに新たなシーケンスが割り込むことも可 p.29
行為

* ブレモン：登場人物は自己に固有なシーケンスの動作主・主人公

* トドロフ：人格ではなく、互いの関係（基底述辞 *prédicats de base*）から分析

* グレマス：登場人物が何者かではなく、何をおこなうかによって分析

行為項：主体 / 対象、送り手 / 受け手、補助者 / 反対者 p.33

物語行為

* 物語の語り手（古典的概念）

一個の人格によって発信される：作者

語り手は非人格的な完全無欠な意識：「神」の視点

登場人物が観察し得ることに限って物語る語り手 p.38

* バルト：語り手も登場人物も本質的に《紙の存在》

物語のなかで語っている者は実生活において書いている者ではなく、書いている者は存在する者ではない p.39

物語の体系

* 総合的言語 (*langue synthétique*：独語) vs 分析的言語 (*langue analytique*：仏語)

物語は本質的にはめ込み式の統辞法によるきわめて総合的な言語

* 物語の組み込み

あるレベルにおいて分離されたものは、たいてい上位のレベル（階層組織の高い段階にあるシーケンス、分散した指標の総括的記号内容など）において接合される

組み込みはイゾトピー (*isotopie*：同位性 グレマス) の一要因

* 物語の創造性は、言語学のコードと超言語学のコードの間にある

もっともコード化されたもの（音素のレベル）から出発し、しだいに緊張を緩めながら結合の自由の頂点である文に達し、次にまた緊張しはじめ、文の小さい集まり（マイクロ・シーケンス）から出発して、制限された強いコードを形作る大きな行為に達する：芸術は細部の言表の問題であるが、想像 (*imagination*) とはコードを制御すること

構造分析からテキスト分析へ

「物語の構造分析 『使徒行伝』10-11章について」 (《L'analyse structurale de récit.

A propos d'« Actes » 10-11 » (1969), in *Recherches de sciences religieuses*, No 58, 1970, repris dans *Exégèse et herméneutique*, Seuil, 1971) in 『記号学の冒険』 【資料 No. 12】

* 物語の構造分析はまだ一つの科学ではなく、学問にもなっていない

一般原則と分析の手順

* 形式化の原則

物語のラングの確立をめざす：あるテキストそれ自体の分析はできない

物語の構造分析は、内容を追求するのではなく、形相を追求する p.146

* 関与性 (*pertinence*) の原則 音韻論

cf. Nikolai Sergeïevitch Troubetsoï, *Principes de phonologie* (1936), trad.

J. Cantineau, coll. « Tradition de l'humanisme », Klincksieck, 1976

意味 (*sens*)：テキスト内的・外的相関関係、引用であり、コードの出発点 p.148

* 複数性の原則：意味 = 可能なものというよりは、可能性の存在そのもの：複数の可能性

* 構造分析は解釈の方法ではない：構造分析 文芸批評 p.153

* 操作的手順

：テキストの切り分け (découpage)

節や章などで恣意的なわけかたも可 レクシ (lexies)

：コードの目録

：調整 (coordination)

標定された単位や機能体の相関関係を確定すること p.155

「使徒行伝」のテキストに含まれる構造上の問題

* コードの問題 (12のコード)

《カイサリアに、「イタリア隊」と呼ばれる部隊の百人隊長で、コルネリウスという名の人がいた》

語り (narratif) のコード、地誌的 (topographique) コード、固有名 (onomastique) コード、歴史的 (historique) コード p.163

《信仰心あつく、一家そろって神を畏れ、民に多くの施しをし、絶えず神に祈っていた》
意味素 (sémique) コード、修辞学的 (rhétorique) コード

《コルネリウスは幻ではっきり見た...》

行為 (actionnel) またはシーケンスのコード (code des séquences)

《午後3時頃...》

時間的継起 (chronologique) のコード

《コルネリウスは、神の天使が入ってきて「コルネリウス」と呼びかけるのを、幻ではっきりと見た》

話しかけ (phatique) コード p.165 cf. Roman Jakobson, « Linguistics and Poetics »

in *Style in Language*, ed. Th. S. Sebeok, M.I.T.Press, 1960

《空からおりてくる天幕》

コードというよりは象徴の場 (champ symbolique)

例文なしで

秘義解釈的 (anagogique) コード、メタ言語的 (métalinguistique) コード p.168

* 行為のコード

：「問い / 答え」といったタイプの二つの核をもつ基本的シーケンス

：いくつかの核をもつ発達したシーケンス p.171

出発する / 探す / ある場所に着く / たずねる / 見出す / 連れ帰る

* メタ言語的コード

：要約 このテキストは物語のメタ言語学的構造の形成という項目に分類できる

ex. コルネリウスの幻視が、使者たちによってペトロに、コルネリウス自身によってペトロにくり返し要約して語られる、など

要約は不完全な引用であり、先攻する言語活動を構造化し、先攻する言語活動そのものも、すでに構造化されている p.174

* 触媒作用 (catalyse)

要約は取りのぞいたり付け加えたりしても物語は存続する：つけたし = 触媒 p.176

* ダイアグラム構造 (structure dyagrammatique)

要約を増やすということは、メッセージの宛先を増やすこと 一つの事柄を多次元でいう このテキストの原動力は、伝達であり、《伝導》であるから

「天使との格闘 創世記32章23-33節のテキスト分析」 (« La lutte avec l'ange :

analyse textuelle de < Genèse > 32.23-33 », in *Analyse structurale et exégèse biblique*, Labor et Fides, 1972) in 『物語の構造分析』

【テキスト性】

作者・作品・テキスト

「作者の死」(« La mort de l'auteur », in *Manteia*, No 5, 1968, publié sous le titre « The death of the author », in *Aspen Magazine*, No 5-6, 1967) in 『物語の構造分析』

* 「作者」は、その存在が信じられている場合は、常に彼自身の書物の過去とみなされ、書物と作者は前と後ろに分けられた同一線上に位置づけられる

現代の書き手 (scripteur) はテキストと同時に誕生する：書き手はエクリチュールに先立ったり、それを越えたりする存在とはみなされない p.84

* 「作者」を遠ざけると、テキストを解読するという意図は無用になる

多元的エクリチュールにあっては、すべては解きほぐすべきであって、解読するものは何もない： p.87

「作品からテキストへ」(« De l'œuvre au texte », in *Revue d'esthétique*, No 3, 1971) in 『物語の構造分析』

* 19世紀においてマルクス主義とフロイト学説が現れて以来、新しい断層は一つも生じていない

アインシュタインの学説が研究対象に基準枠の相対性を含ませるように義務づけたのと同様に、文学においては、マルクス主義とフロイト学説と構造主義との複合した影響が、書き手と読み手と観察者(批評家)の関係を相対化するように義務づける

* 長い間、いわばニュートンの方法で考えられ、今もなおそう考えられている伝統的な観念、作品に対して、従来の範疇をずらし覆すことによって得られる新しい対象が要求されている 「テキスト(Texte)」である p.92

1 「テキスト」は数えられる対象ではない

作品とテキストを物質的に区別はできない

作品は物質の断片であり、書物の空間の一部を占めるが、「テキスト」は方法論的な場である p.93

作品は姿を見せるが、テキスト(texte)はある種の規則にしたがって論証され語られる 「テキスト」は作品の分解ではなく、ある作業、ある生産行為(production)のなかでしか経験されない：「テキスト」を構成する運動は、横断(traversée)である

2 「テキスト」は文学だけにとどまらない

「テキスト」を構成するのは古い分類を覆す力である：言表行為の諸規則の限界へと向かう p.95

3 「テキスト」は記号との関連からアプローチし、経験することができる

作品は記号内容によって閉じられ、その内容が明白なものであると主張されると文学の対象となり、その内容が秘密で最終的なものとみなされるとそれを探す解釈学にゆだねられるが、「テキスト」は記号内容を無限に後退させ、延期させる(dilatoire)ものとなる p.96

4 「テキスト」は複数的である

「テキスト」がいくつもの意味をもつのではなく、意味の(還元不可能な)複数性そのものを実現する：意味の共存ではなく、通過であり横断である

その複数性は内容の曖昧さに由来するのではなく、「テキスト」を織りなしている記号表現の立体的複数性(pluralité stéréographique)とでも呼べるものに由来する p.97

テキストはそれ自体が他のテキストの中間テキスト(entre-texte)であり、あらゆるテ

クストはテキスト相互関連 (intertextuel) にとらえられるが、それはテキストの起源と混同されてはならない：作品の《源泉 (sources)》の探求は系譜の神話を満足させるにすぎない p.98

- 5 「テキスト」は「父」の記名なしに読まれる
作者は作品の父であり、所有者であるとみなされ、作品は有機体（生命による拡大）のイメージに関係するが、「テキスト」は網目であり、結合関係・体系性の効果によって広がる：生命の尊重は不要で、「テキスト」は砕く (cassé) ことができる p.100
- 6 作品は消費の対象であるが、「テキスト」は作品を消費からすくい、労働、生産、実践として回収する：読者に実践的協力を要請する
「テキスト」はエクリチュールと読書と同じ記号表意的実践 (pratique signifiante) のなかで結びつけることによって、両者の距離をなくす p.101
- 7 「テキスト」は享楽 (jouissance)、距離のない快樂 (plaisir) と結びつく
「テキスト」は、いかなる言語活動 (langage) も優位に立たないような、すべての言語活動が交流する空間 (espace) である p.104

テキスト理論

クリステヴァのテキスト理論 (Julia Kristeva, 1941-)

- * Σημειοτική - *Recherches pour une sémanalyse*, coll. < Tel Quel >, Seuil, 1969. [Sé と略記]
『記号の解体学 セメイオチケ 1』、原田邦夫 訳、せりか書房、1983
『記号の生成論 セメイオチケ 2』、中沢・原田・松浦・松枝 訳、せりか書房、1984
- * *La révolution du langage poétique*, coll. < Tel Quel >, Seuil, 1974. [R と略記]
『詩的言語の革命 第1部 理論的前提』、原田邦夫 訳、勁草書房、1991

テキスト：初期【テキストの導入】

直接的情報をめざす伝達のパロールを、それに先行したり共時的であるさまざまなタイプの言表と関連づけることにより、言語秩序を再編する超言語的装置 (appareil translinguistique) であり、テキストはしたがって生産性 (productivité) である

：テキストとテキストが身を置く言語との関係は再編的 (redistributif : destructivo-constructif) で、テキストには言語学的というより論理的カテゴリーを通して接近することができる

：テキストは諸テキストの置換 (permutation)、テキスト相関性 (intertextualité) であって、その空間では他のテキストから取り込まれたいくつもの言表が交差、中和される (« Le texte clos » in Sé, p.113 : 「閉じたテキスト」 in 『セメ 2』 p.119)

テキストは、

：言語 (学) 的現象、印刷されたテキスト、意味づけられた構造 (structure signifiée) であるところの「フェノ テキスト (phéno-texte) 」と

：フェノ テキストを生成する作用、意味する生産性 (productivité signifiante) であるところの「ジェノ テキスト (géno-texte) 」

とに分けられる (« L'engendrement de la formule », in Sé, p.280 sq. : 「定式の産出」 in 『セメ 1』 p.166 sq.)

- * フェノ テキストが関わる従来の意味作用 (signification) を扱う記号論 (sémiotique) に対し、ジェノ テキストによってもたらされる意味生成 (signifiante) の領域を覆う体系として提唱されるのが「記号分析学 (sémanalyse)」である (« Le texte et sa science » &

« L'engendrement... » in *Sé*, pp. 9, 279 : 「テキストとその科学」 & 「定式の...」 in 『セメ1』 pp.10, 165)

テキスト：完成期

【言語学上の主語 (sujet) を精神分析学の主体 (sujet) と関連づけつつ意味生成のメカニズムを説明】
「テキスト・生産性」から「意味生成」を経て「意味生成の過程 (procès de la signification)」へ

* 意味生成の過程は、

- ：すなわち欲動の渦巻く「セミオティック (le sémiotique)」と
- ：主体が支配する「サンボリック (le symbolique)」

との弁証法を通して説明される

セミオティックとは理論的にはシンボル化 (= サンボリック) に先立ち、実践面においてはサンボリックに内在し、アナログかつデジタル、離散的でありかつ配置されているコーラ (: 場所) である (*R*, pp. 23, 35, 65, 67 : 『詩的...』 pp. 15, 29, 64, 66)

サンボリックは、言語のうちにあっては記号の次元に属し、統辞及び言語カテゴリーの総体と見なされ、シンボリックの秩序、すなわちラカンのいう象徴界に相当する (*R*, pp. 29, 68 : 『詩的...』 pp. 20, 69)

両者間の境域に主体及び意味作用の措定 (position) を生む断絶として機能するのが「定立相 (phase théthique)」であり、それはイマゴの措定、他者の場としてのセミオティックな能動性の措定、去勢、さらに、鏡像段階に始まり、男根期を経て思春期におけるエディプスの再活動で完成するものとして必然的なものである (*R*, pp. 41, 46, 61-62 : 『詩的...』 pp. 37, 42, 58-59)

* 定立された主体にとって、主体産出の場であるコーラ・セミオティックは己の否定の場であるため、主体の統一はそれを生む負荷と鬱積の過程に屈してしまう

セミオティックのこうした産出のプロセスは「否定性 (négativité)」と呼ばれ、意味生成の過程は定立的否定性とも考えられる (*R*, pp. 27-28, 54 : 『詩的...』 pp. 18, 50)

定立を生み出す運動の論理的機能作用である否定性は意味主体におさまらない過程の在処を示しており、「否定性」が自然及び社会の客観的闘争の諸法則の結合と過程の起源を一元的主体の論理的意識の中に置くことになってしまう場合には、「棄却 (rejet)」とも呼ばれている (*R*, pp. 101, 110 : 『詩的...』 pp. 114, 125)

この否定性・棄却ゆえにセミオティックは絶えずサンボリックを脅かし続ける

その根源には欲動の二項性 (binôme pulsionnel) の閉じることのないリズムが宿り、セミオティックが定立を引き裂き侵犯することによる意味実践の変容が《創造》を生み、侵犯の否定性によって定立を砕き潰しながらも、定立を手放さないのが《芸術》の本質である (*R*, pp. 62, 68, 94 : 『詩的...』 pp. 59, 67, 103)

もはや主体は意味生成の過程でしかなく、姿を現すのは意味を生む実践として、つまり主体が意味生成という複合的行程を踏破し、意味生成を体系として閉ざすことなくその過程の無限性を受け入れる限りにおいてでしかない (*R*, pp. 95, 98, 188 : 『詩的...』 pp. 105, 109, 240)

こうした過程を遂行しつつ、否定のシンボルによって確立され、統一体を砕いてもろの定立を措定・移動させる過程にする実践こそが「テキスト」なのである (*R*, pp. 98, 150, 183 : 『詩的...』 pp. 109, 182, 232)

「テキスト その理論」 (« Texte (Théorie du) », in *Encyclopædia Universalis*, tome 15, 1973)
in 『現代思想 特集 = 構造主義以後』、青土社、1981年7月号 【資料 No. 13-14】

テキスト分析

『S/Z』 【資料 No. 16-17】

高等学術研究院 (École pratique des hautes études) における1967-1969年のセミナーでの成果：バルザック (Honoré de Balzac : 1799-1950) の短編『サラジーヌ』 (Sarrasine, 1830) の分析

* 『サラジーヌ』のあらすじ

篠田浩一郎、『ロラン・バルト - 世界の読解』 【資料 No. 15】

* テキストの価値

科学やイデオロギーから価値はうまれない 価値判断はエクリチュールの実践から作家の実践の内にあるもの：書きうるもの (scritable) どんなものを書きうるかが価値判断に関わる p.6

文学制度の内に固定化された読者はテキストの受容についてしか自由をもたない：書かれるのではなく、読み得ることのできるすべてのテキスト：古典的 生産物 書き得るテキストとは永遠の現在であり、小説のない小説的なもの、詩のない詩的なもの、論文のない論述の試み、文体のないエクリチュール、生産物のない生産、構造のない構造化作用である p.7

* テキストの解釈

一つの意味を与えるのではなく、それがいかなる複数から成り立っているのかを評価すること：複数のテキストには語りの構造も文法も論理も存在しない

* コノテーション

コードの出発点であり、テキストに折り込まれた声の分節であり、テキスト制御の可能性である p.11

* 読書 cf. 資料：読むこと 労働

* レクシ (lexies)

テキストにひびを入れ、原テキスト (texte tuteur : 後見・後援) の記号表現を切り分け断片にしたもの：読書の単位 p.16

* 目的：一つのエクリチュールの立体的空間のスケッチ

『サラジーヌ』を561のレクシに分割し、

：解釈 (HER)

：意味素 (SEM)

：象徴 (SYM)

：行動 (ACT)

：文化あるいは指向 (REF)

というコードをもとに解読：読み得るテキストについて書き得るテキストの実践

テキスト性

『表象の帝国』 【資料 No. 18】